2023年8月27日佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書5章8節
説教題：神を見る「きよさ」とは

横山幹夫という先生が数年前に「信徒大会」に来て下さいましたが、ご自分の本にこんな話を紹介しておられます。ニンニクを思い切り食べた夜、腹に激痛が走り、病院に駆け込みましたが、病院のスタッフが「何か変な臭いがする」と言い始めました。先生は力なく「ニンニクを食べすぎて…」と答えました。病名は腎臓結石だったのですが、手術の時も、入院しても、回りの人が「何か臭う」と言うのです。その度に「すみませーん、私です、ニンニクを食べすぎて、腎臓の石が手を離しました」と説明したそうです。その経験から「私は今、回りの人にどんな香りを残しているだろうか」と問うておられました。もちろん、人に与える印象という意味での香りです。皆さんは、回りの人にどんな香りを残しておられるでしょうか。

これは講演でのお話ですが、横山先生がある時、病院伝道を始めましたが、なかなか上手くいかない。しかしそんな時、あることを通して自分が「きよめられる」経験をされたそうです。自分がきよめられると、自然と人が先生の話を聞いて信じてくれるようになった。「『伝道とは、こうやって為されて行くのか』と思った」と言っておられました。その話を聞いて、私も「きよめられたい」と思いました。伝道するためにもそれが必須なら、本当に「きよめられたい」と願います。しかしそれ以上に、聖なる神様を「私の神」と仰ぐ者として、きよくありたいと、私達は願うのではないでしょうか。イエス様は「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(8)と言われましたが、「きよい」とはどういうことなのでしょうか。どうすれば「きよく」あれるのでしょうか。学んで行きましょう。

イエス様の時代のユダヤ教においても、ユダヤ人は「きよさ」を求めました。その代表はパリサイ人と呼ばれる宗教指導者でした。しかし彼らが求めたのは、外側の「きよさ」でした。例えば、彼らは手洗いを徹底しましたが、それは衛生のためではない、「万一どこかで汚れたものに触れて汚れていてはいけない」と考えて、儀式的な、形式的な手洗いで自分をきよめたのです。あるいは、自分達が「きよくない」と思う人を遠ざけました。側にいても、いないことにしました。無視するのです。そうやって自分の「きよさ」を保とうとしたのです。

しかしイエスは、そのような在り方を非難されました。外側ばかりを大事にする、自分の「きよさ」を保とうとして人を人とも思わないような行動に出る、その彼らに、イエスは言われました。「いまわしい人たちよ…あなたがたは偽善者です。杯の外側はきれいにみがき上げるが、内側は…汚れきっています…まず杯の内側をきれいにしなさい。そうすれば、杯全体がきれいになるのです」(マタイ 23:25～26 リビング・バイブル)。特にパリサイ人は、人を避けるだけでなく、「あいつらはきよくない」、「あいつらはダメだ」と言って裁いていました。それは、イエスが一番嫌われた姿でした。(つまりイエス様から見て一番「きよくない」姿だったのです)。

ここでイエスも、「きよさ」を問題にされましたが、イエスは「心のきよい者は…」と言われました。イエスが問題にされたのは、外面的な「きよさ」ではない。まして自分の「きよさ」のために、他の者を見下げた扱いをする、そのようにして守られる「きよさ」ではないのです。「聖書」に「人はうわべを見るが、主は心を見る」(1サムエル16:7)とある通り、「心のきよさ」、「心のあり様」を問題にされました。

その時、ここで使われている「きよい」という言葉は、元々「混じりけがない―(不純物がない)」という意味の言葉です。しかしそうすると、私達は「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(8)という言葉に、別の意味で絶望するのではないでしょうか。「私達の心は神の前にきよいのか―(不純物がないのか)」、それが問われます。確かに「きよい」部分もあるでしょう。でも、森繁さんの「スピード違反」という歌の中に次のような話があります。「『皆さんの中で、今まで一度もスピード違反をしたことがない人、ハイ手を上げて』と言ったら、45歳くらいの女性が手を上げた。そこにいた皆がビックリして、私もビックリして、『奥さん、本当に今まで一度もスピード

違反をしたことがないんですか』と尋ねたら、その人が言った、『一度も捕まったことがないんです』…」。きつい言い方をすれば、私達の中に「きよい」部分があったとしても、こんな様なものではないでしょうか。「悪いことはしていない。私は真面目に生きて来た」、多くの人がそう思っているのではないでしょうか。確かに犯罪は犯していないかも知れない。しかし、どうでしょうか。心の中を正直に見つめると、私達は「自分は神の前にきよくない」と思わされるのではないでしょうか。皆さんが、先週考えたこと、思ったことが、このスクリーンに映し出されるとしたらどうでしょうか。心の中に不平不満は、憎しみや怒りは、ないでしょうか。妬みはないでしょうか。どうしようもなく人を受け入れられない、嫌うものはないでしょうか。(社会を騒がす事件でも心の内の怒りや憎しみから始まるのです)。あるいは、神を信頼し切れない不信仰はないでしょうか。かつて出会った牧師の息子さんが私に言いました。「先生は牧師ですよね。牧師と言うのは、恵みを語りながら恵みに生きられない人達ですよね」。私が最近示された聖書の言葉は「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな」(箴言 3:5)という言葉です。しかし「拠り頼み切れない」不信仰があります。いずれにしても、そうやって自分の「きよくなさ」にがっかりするのが私達の現実ではないでしょうか。そうすると、イエス様が言われたこの「心のきよい者は幸いです」という「祝福の言葉」は、私達には関係がない、「祝福の言葉」どころか、私達を絶望に追い込む言葉なのではないでしょうか。

しかし、ではイエスからこの言葉を語りかけられている人々は、「心のきよい人々は幸いだ」と言ってもらうのに相応しい人々だったのでしょうか。ある神学者は、「心がきよい」、それを「動機において純粋」と説明しました。では、彼らは「動機において純粋」だったのでしょうか。そうではない。弟子達さえ、自分勝手な動機でイエスに従っていたのです。最後まで「誰が一番偉いか」と言い争っていたのです。そう考えると、イエスは違う視点を持ってこの言葉を語っておられるのではないでしょうか。

「きよい」という言葉、これは本来「混じりけがない」という意味だと申しました。しかしもう 1 つの意味がある。それは「単純」とか「皺がない」とか、さらにそこから派生して「一途」、「愚直」、そのような意味です。実はここに、この言葉を理解する鍵があるのです。「心のきよい者は幸いです…」(8)。しかし私達には「(『混じりけのない純粋さ』という意味での)―心のきよさ」はない。ではどうするのか。ただ絶望するのか。

この問題を泣き叫びながら問わざるを得なかったのが、「旧約」のイスラエルの王ダビデです。ダビデは、自分の部下ウリヤの妻バテシェバと姦通の罪を犯し、その罪を何とかごまかそうとして、彼女の夫ウリヤを激しい戦場に送って死に至らしめて、どさくさに紛れてバテシェバを自分の妻にしてしまいました。それで有耶無耶に出来ると思っていた重大な罪を、預言者ナタンに責められて泣かざるを得なかったのです。彼は、それまでも信仰の人でした。ただ神の恵みによって今の自分があること、国の祝福があることを知っていました。だから神の前に立つことが出来なくなれば、もう希望がない、生きて行く力がない、そういう心境に追い詰められたのです。(私はある時、「神は私と共におられないではないか」という思いに襲われたことがありました。もう力が出ません)。その時に、彼はどうしたのか。彼は神に叫ぶのです。「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください…神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちにあたらしくしてください…」(詩篇 51:1,2,10)。彼は言うのです。「私の中には『きよさ』はありません。私にあるのは『罪にまみれた心』だけです。赦して下さい。きよめて下さい。この私にきよい心を造り出して下さい、それ以外に御前に立つ方法はないのです」。しかし、彼の祈りは 17 節でこう変わります。「神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません」(詩篇 51:17)。自分の中に「きよさ」が無いことを見せられ、彼の魂は砕けて、ただ神を見つめる、ただ神が関わって下さることを一心に求める、他の何も目に入らない、ただ神の憐れみだけに目を向けるのです。しかしこれが「一途な心」、「愚直な心」

ということではないでしょうか。全ての自分の誇りや賢さや、そういうものを全部捨てて、ただ単純に、愚直に神に向かったのです。その時、彼は、「神よ。あなたは、砕かれた、悔いた心を、さげすまれません」と言うことが出来たのです。神に触れられたのです。そして、それが「聖書」に書かれているということは、神様もそう言っておられるということです。

もう1つ、5章8節のイエス様の言葉を理解するために大切な聖書の箇所は、「ルカ18章」の「パリサイ人の祈りと取税人の祈りのたとえ」です。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください』。あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」(ルカ18:9～14)。パリサイ人が祈りの中で意識しているのは、神よりむしろ自分—(自分の立派さ)—です。それが「心の皺」です。「一途さや、愚直さのない心」です。一方の取税人は、ただ神の憐れみを請うしかない。胸を打ちたたいて「こんな私を憐れんで下さい」と愚直に、ただ神に思いを向けるのです。その時、イエス様は「義と認められて家に帰ったのは取税人だ」と言われました。「義と認められた」ということは、「きよい者」と認められたということです。

イエスの言われた「心のきよい者」とは、一途に神を見つめるダビデの心、一途に神の憐れみにすがる取税人の心、そういう心のことなのではないでしょうか。「私の中には、神の前に立ち得るきよさはない、神を見るきよさはない」、それを心から知る者は、自らを憐れんで下さる神に、ひたすら目を注ぐのです。「神様、きよくない私を赦し、受け入れて下さい、神様、私をきよめて下さい」と、愚直に、一途に神に目を向けるのです。その遜った心こそ「神に受け入れられる心」なのではないでしょうか。そしてその時に、人は「赦しの神」を見るのではないでしょうか。イエスが言われたのは、そういうことではないでしょうか。それなら、私達も経験できる幸いです。

以前も申し上げましたが、私は学生時代に教会に戻った後も、信仰がよく分かりませんでした。ところが就職した後、仕事上の失敗を通して、やっと「私も罪人だった—(醜い人間であった)」ということが分かった、いや、分からせて頂きました。周りの人が皆、私を責めるような態度を取った時、私は「とにかく赦されたい」と思いました。そういう思いを持ちながら足取り重く教会に通いました。私には、およそダビデや取税人のような一途さはありませんでした。それでも、私のような者でも、教会に通う内に教会を通して「あなたは赦された」と語られる神の細き御声を心に聞いたのです。初めて神にお会いした気がしました。相変わらず周りの人はよそよそしかったのですが、「人が何と言おうが、私は神に赦された」、その赦しにすがって、私はそこを通り抜けることが出来たのです。

罪を抱え、しかしだからこそ「この私を憐れんで下さい」と神に目を注ぐ時、私達も、キリストの十字架に表される「赦し」のメッセージを通して、魂の目で神を見ることが出来るのではないでしょうか。であれば私達は、自分の「きよくなさ」に絶望しなくて良い。イエス様のこの言葉は「きよくない」私達にとって「祝福の言葉」なのです。私達も自らの「きよくなさ」を握りしめて、一途に、愚直に神を見つめれば良いのです。

そしてそれだけでなく、聖書にこんな言葉があります。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハネ1:9)。「水曜集会」で「矢嶋楫子」という人の動画を見ました。矢嶋楫子は戦前日本のキリスト教界の指導者であり、教育者でもあった人です。彼女は、40歳を過ぎて「妻子ある人との間に子供ももうける」という大変な過ちを犯してしまうのですが、その後のことを、彼女を描いた「我弱ければ」という本を書いた三浦綾子さんは、こう書いています。「楫子は…理性的な人間だと人

に思われ、自分でもそう信じてきた。そしてまた誰の目にも…道を踏み外すような…女ではなく、常に自己を制して生き得る人間のはずだった。その楫子が過ちを犯した。(人間は弱い！)。楫子は身にしみてそう思った…信じきっていた自分自身に裏切られた楫子は、すべてのことを神に祈るよりしかたがなかった。神こそがすべてのことに答え得る方であり、導き得るかただった。楫子は幼子のように神の力を信じ、神の愛を信じた…」。彼女は、生涯、自分を義―(「きよい」)―としない。「きよくなさ」を、「人間は弱い」ということを忘れないのです。「赦された罪人」として十字架を仰ぎ続けます。そして「赦された者―(赦され続けている者)」としてものを見、人を見、生きて行くのです。その生涯の中で人々に感動を与える「愛と赦し」の足跡を残して行くのです。「きよく」生かされて行くのです。罪を自覚し、告白し、だからこそ神を一途に、愚直に見上げる時、私達も、聖霊が働いて、「きよく」生かして頂けるのではないでしょうか。

最後にもう１つ申し上げて終わります。イエスは言われた。「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(8)。しかしこの言葉は、恐らく今のことだけを語る言葉ではありません。パウロは言いました。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」(1 コリント 13:12)。やがて私達が、新しく頂く霊の体の目によって、本当に神を見る時が来るのです。「天国は本当にある」という映画では、コルトンという天国に行って帰って来た少年は、礼拝中のある瞬間に教会の講壇に天国の幻を見るのです。天使が歌うのです。私達は今、その幻を見ることが出来なくても、イエスを信じるなら、いつか必ず天国に行き、天国において、本当の意味においてきよめられた私達は、神を見るのです。

その時まで具体的に私達がすること、それは礼拝です。礼拝を通して神を見上げることです。礼拝を通して、聖書のイエス様の言葉、お姿を通して、砕かれた、悔いた心で神を見上げることです。三浦綾子さんが亡くなった時、東京の教文館の社長が「三浦綾子追悼の言葉」というのを店に掲げました。こんな件があります。「私どもも世にある限り、三浦綾子さんのように礼拝を固く守り生きて行きたいと思う。絶えず神様を仰ぎ愛し求め、そして隣人に対し温かく優しい思いやりのある生きがいのある人生を歩んでまいりたいと思う」(中村義治)。「礼拝を通して一途に神に目を注ぎ、きよくありたいと願うからこそ、パリサイ人のように他人を排除するのではなくて、隣人に対して思いやり深く生きる、神の愛に生きる」、イエス様が言おうとされたこと、それがここに込められているように読みました。